

令和元年度中学校武道授業（柔道）指導法研究事業



梶谷研究者による指導法発表

令和元年度中学校武道授業（柔道）指導法研究事業〔主催＝日本武道館・全日本柔道連盟・日本武道協議会、後援＝スポーツ庁、協力＝練馬区立貫井中学校〕は、令和元年6月14～16日の3日間、講道館（東京都文京区）において実施された。10月に実施する第10回全国中学校（教科）柔道指導者研修会に向けて、安全かつ効果的な指導内容、留意事項などを明確にすることを目的に指導法発表、研究協議が行われた。

■1日目（6月14日）

開講式では、はじめに吉田行宏全日本柔道連盟事務局長が主催者挨拶に立ち、「本研究事業は、10月の全国研修会に向けた指導法の研究が主な内容です。全国の約6割の中学校で柔道が採用される中、連盟としては、柔道が安全かつ楽しく効果的に行われることが重要だと考えております。3日間が実り多い研究事業となるよう期待しています」と述べた。

続いて、三藤芳生日本武道館常任理事・事務局長が挨拶し、「令和3年度から武道9種目が並列明記される新学習指導要領の完全実施に伴い、それに基づく指導案が求められることとなります。本年度はスポーツ庁が外部指導者を活用した複数種目モデル実践校の予算・事業化を図り、中学校武

道必修化は第2ステージに入りました。柔道はオリンピックに向けた国内の盛り上がりも含めて追い風が吹いており、期待が高まっています。本研究事業での成果を全国研修会につないでいただき、中学校の柔道授業が安全で楽しく効果が上がる形で実践できることを願っています」と述べた。

開講式終了後、高橋健司研究者の司会で研究事業は進められた。はじめに、磯村元信研究者より新学習指導要領の解説が行われた。小内刈りと上四方固めは、実際に取り入れている学校も少なく、指導が難しいことから、1・2年生から3年生に移行。例示技の表現もわかりやすく改善されたと説明があった。また、スポーツ庁「武道等指導充実・資質向上支援事業」に係る武道指導に関する調査結果を報告。約6割の学校に武道場が設置され、平均9時間の授業、大外刈りなどの技の制限は4分の1の自治体で禁止している。外部指導者の活用は6割と、柔道が一番多いものの、担当教員は、柔道を専門としない先生が9割を占めており、ほとんどの中学生が専門家に教わっていないことが分かった。課題として、愛好的な態度、課題解決力、技の習得の3つが低い値であることが挙げられた。また、調査結果を受けての検証授業においては、効果的な単元計画により、愛好的態度が平均より20～30%高くなったことから、単元計画の

重要性が見てとれる。平成 30 年度に初めて行われた高校における実態調査の結果からは、入学時の技の習得度にかかなりの個人差があるので、中学校の授業では、楽しさを伝える工夫、技の選定や指導方法の統一が求められることが分かった。

続いて、熊野真司研究者、田中裕之研究者より講話があり、その後、各研究者より、2 日目に発表する指導内容の説明があり、初日を終えた。

■2 日目 (6 月 15 日)

研究協力者として参加した練馬区立貫井中学校柔道部生徒 (43 名) を対象に、各研究者が指導法の発表を行った。発表内容に対しては、意見を出し合い、共通理解を深めた。指導内容、手順、留意事項、使用する柔道用語などは『中学校武道必修化指導書柔道編』『安全で楽しい柔道授業ガイド』を参考に確認し合った。

午前中は、高橋健司研究者が基本動作、鮫島康太研究者が受け身・膝車、遊佐英徳研究者が固め技・抑え技、米田輝彦研究者が大腰の指導法をそれぞれ発表した。

鮫島研究者の発表では、受け身の指導について、受け身をとる際、腕の開く角度を 30 度と初めから提示した指導を行った。他の研究者からは、いろいろな角度を生徒に試させ、どの角度が一番強く叩けるかを生徒に気付かせる指導方法もあるとの意見が出た。また、頭を打たないように、顎を引く動作に必要な筋力が足りない生徒には、顔を横に向けて慣れさせる指導法も紹介された。

午後は、梶谷宗範研究者が体落とし、森英也研究者が投げ技、坂井武彦研究者が連絡技、福井学研究者が投げ技の自由練習、與儀幸朝研究者が固め技の自由練習をそれぞれ発表した。

梶谷研究者は体落としの指導において、4 段階に分けた指導方法を発表した。初めの段階では、受けが両膝をついた低い姿勢から行い、受けが恐怖心を持たないように「投げる」ではなく「転ばせる」という言葉を用いて説明した。

■3 日目 (6 月 16 日)

最終日は、2 日目に行った発表内容を基に、研修

会当日の進め方、カリキュラムの詳細、講師の分担などを話し合った。どのような技の流れで研修を進めていくのか、参加者の運動量は十分かなどについて、議論が繰り広げられた。

最後に、熊野研究者、田中研究者、高橋進研究者より総括が述べられた。

○熊野研究者

各担当の指導内容を見て、より良い研修会ができると感じた。参加者に柔道の授業はどのようなものなのか、全体像をしっかりと捉えてもらうことが大切だ。それを持っていないと授業が成り立たない。また、自分たちが理解している内容を一方的に相手に伝えようと話をしてはならない。参加者を通して子どもたちがどのように理解するのかを考えながら、安全面を第一に進めていきたい。

○田中研究者

授業の中で学び合いをさせるためには、教員の入念な準備と手立てがなければ良い指導にはならない。また、評価についても「良かった」「悪かった」だけではなく、「何がどう良かった」のかを具体的に示すことで、子どもたちの表現力を引き出していきたい。

○高橋進研究者

今回の研究事業では 5 つの要点が確認できた。
①目標を明確にし、研修会の見通しをしっかりと立て、イメージがわく研修会にする。
②系統性、一貫性があり、効果的で合理性のある、学びが進化するような場面を提示しながら研修会を進める。
③してはいけないこと、やらなければならない指導の徹底を安全面から行う。
④アクティブラーニングや教え合いの場面など、相互作用があり、わくわく感を感じられる研修会にする。
⑤授業はもちろん、研修会でも運動量の確保を念頭に置く。以上の 5 点に、評価も蓄積していきながら、参加者の意見も付加した上で研修会を進めていきたい。

閉講式では、木村昌彦研究者が「何のための授業なのかを考え、教師自身が輝いていきいきと授業ができるよう、研修会を作り上げていきましょう」と締め括り、全日程を終了した。